

2014年度（平成26年度） カラ事業報告書



ニヤマコロブグー村小学校の建設が始まりました。

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

東京事務局 〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

電話 0422-29-7640 FAX 0422-29-7688

バマコ事務局 BP-E 367 BAMA KO

電話 00223-2020-90-96 FAX 00223-2020-35-89

約3年振りのマリ現地訪問

村上 一枝

平成24(2012)年3月9日に帰国して以来、平成26(2014)年12月、新規の外務省の「日本NGO連携無償協力」事業の契約の為、約3年ぶりにマリへ行き、平成27年(2015)2月にも1ヶ月滞在しました。

アメリカ合衆国の支援資金によるセヌー国際空港の拡張・リニューアル建設が途中で放置されたままの空港では、エボラ出血熱の発症のため入国に際して非常に厳しくチェックを受け、空港の外へ出るのに長い時間がかかりました。しかし、マリに入国できたものの事業現地の村での宿泊は禁止され、朝6時前にバマコを出発し明るい内に帰路に着くようにという、日本大使館からの指示を受けてのミッションでした。12月は気温も適度に暑く気持ちの良いさわやかな時候で、この時期の少し寒い夜には、焚火を囲み満点の星の下でのおしゃべりは、本当に楽しいものですが、残念なことに日帰りを強いられました。



村へ向かう街道の光景も変化していました。道の両側のコットン畑は収穫後の茎が残っているだけでした。また、家一軒も無く延々と続くラテライトの道の、とある個所には新しい集落が出来て、トラクターや給水塔、セ

メント建設の家が建っていて非常な驚きでした。野菜園も植林も行われていました。出稼ぎから帰郷した人が作った集落なそうです。出稼ぎで得た資金を投入して土地の肥えた村にお金を払い、権利を購入して開墾したのです。多分出稼ぎ大成功者が一族を率いて生活を始めたのでしょうか。そして道すがら、乾季のため水を求めて移動する牛や羊の群れを目にしました。これら家畜の数も以前よりも増えた感じです。特に牛の数が多くなったようです。経済的に以前より余裕が出てきたのだと思いました。サハラ砂漠で独立の為に戦っている国民や、着々と道を切り開いている国民もいて、複雑に絡み合っている多部族国家の特殊な状況を見た思いでした。

カラの平成 26 年度の現地事業は、旧事業地（バブグ村周辺）の「夜明け・目覚め」とでも言える年でもあったと思います。今回はその事をメインにご報告致します。

～教育～

2011 年 11 月から 3 年間継続していた JICA 支援による教育事業が 2014 年 10 月末に無事に終了しました。クーデターの年に帰国したまま日本人の現地視察が不可能なため日本から綿密な連絡を取って事業を継続していました。現地スタッフだけで確実に実施し、終了に至った事は非常に喜ばしいことで、JICA での報告会でも高い評価を得ました。日本・マリ側スタッフと村民全員が一致団結して取り組んだ結果です。この事業は識字教師の技術向上のために、上級バンバラ語教師には新たにフランス語研修(C-A)を、まだそこまで到達していない教師には更にバンバラ語教師としての技術養成(C-B)の 3 年間の事業でした。

研修会の成績：

この識字教師の研修会では 3ヶ月ごとに試験をして成果を見てきました。

2 部門に分けた研修会では、自主的に両研修に参加して学んでいる教師もいました。



研修会で学ぶ女性

アシスタントスタッフのシャカジャラは、16 歳でカラに勤務し、現在まで村から 1 歩も出ることなく 20 年間働いています。当初は字も書けなく読む事も出来ませんでした。他のスタッフはとても優秀で外国へ出稼ぎに行ってしまうましたが彼は村に残っていました。本来なら今は指導・監督する立場なのですが、この時は自主的に研修生となり受講していました。彼の 2 人の子供は、バブグ村に学校が出来たのでそこで学んでいます。子供に負けないように、ということ事のようにです。このような人を含んでやはり古くから識字学習を行っていたクーラ及びバブグ地区の人々の試験結果がトゥグニ地域の人たちの成績と比べて、ダントツに良好でした。バンバラ語研修会では、マリの識字振興省既定

の問題による最終試験の結果、全研修生の平均点が 6.06 点でした。この点数は、識字教師となりうる合格点の 5.0 点以上をはるかに超え、更に国の識字指導員として専門家になりうる上級教師を目指す研修資格を得た成績です。研修生総数 96 人中、出稼ぎに行った人も多く最終的に 71 人が受験しましたが、62 人（80.5%）が合格点でした。しかし、上級研修を受けて専門家になるには高額な受験費用が必要で、村の人にはとても困難です。この 62 人は、居住地域で教師として指導出来ませんので、村にとって、又コミュン(郡)にとって貴重な人材です。カラは 3 年間の研修で識字教師を 50 名増やす目的でしたが、90 名が誕生し、既存の教師と合わせて 290 人の識字教師が誕生しました。この識字教師の研修は、月 14 日開かれている村の人たちへの識字学習に大きなモディベーションとなり、人々の意識の向上につながっています。

ドゥンバ、トゥグニ両地域では、2000 年頃には識字を学んでいる人は、人口約 16,000

人の地域(87ヶ村)で、月に延べ 15,000 人程度でした。しかし 2015 年この事業が終了する頃には、延べ 22,033 人となり 1.5 倍の人数になり、多くの人が字を書き読めるようになったのです。

マリの公用語であるフランス語の研修を更に長く望む声が他の地域から上がりましたが、残念なことに費用の都合で不可能です。

平成 26 年度の新たな外務省N連事業資金による学校建設が始まりました。これはシンザニ中学校とニャマコロブグー小学校の建設です。現在 7 月末にはシンザニ中学校建設を終了し外装は雨期明けに行ないます。ニャマコロブグー小学校もほぼ建設を終了し 2 校共に雨期明けには机やその他の備品を運び込み 11 月末に落成式を行なう予定です。学校建設には村の人の協力が絶対的に必要です。建設会社の話では、現在まで多くの村にカラの依頼で学校建設を行ってきたが、村の人たちの団結や協力はニャマコロブグー村がベストである、と言っています。

現在、カラの活動地域でも教育意識が非常に高くなり、特に中学校へ進学する生徒が増



えました。このシンザニ中学校が開設されると 30 ヶ村に中学校が 2 校出来たこととなりますが、まだまだ不足です。しかし、高等学校はカラの関わる 3 コミュン 87 ヶ村には全くありませんから、如何に優秀な子供がいても地元の高校へ上がることは困難です。都会の高等学校への進学となると両親の負担が非常に大きくなります。

写真：2004 年造成シンザニ小学校林の後方に新築されたシンザニ中学校。

～ニャマコロブグー村に付いて～

特にニャマコロブグー村の人々の働きぶりについて・・・

この村の旧小学校は次のページの写真にあるような建物?でした。広い村の小高い公共広場にポツンと立っています。この教室に入りきれない生徒たちは村長宅の小屋や他の場所で学習しています。この小学校には近郊のドゴ(同 200 人)、バンザンドゥ(同 113 人)、ザンクラ(同 132 人)、フカレンソー(同 158 人)の 4 ヶ村と、ニャマコロブグー村(人口 306 人)の子供たちが通学しています。5 ヶ村合わせて 1,000 人に満たない人口ですが、旧校舎には 99 人(男児 40、女児 59 人)の生徒が学んでいます。絶対に女兒が多いのはここ数年の傾向です。新小学校には 130 人前後の生徒数になる予定です。マリでは、教室不足や村に小学校が無いので、国連ミレニアム計画でもあり、マリ政府力を入れている小・中学校 9 年生の義務教育の徹底は、不可能な事は明白です。特に地方では、小学校入学が 2 年に一度の村が多いのです。ニャマコロブグー村小学校もそのようでした。でも今後はこれがクリアされるそう

です。この村の人たちの意識の高さは、教育面だけではありません。子供を健康に育てると言う人々の意気込みです。その為に村管理の産院も建設中です。現在は村誕生第一号の助産師を目指してバマコ市の病院で研修を受けています。この産院は地域住民の期待を担って2016年1月に開設されます。村で明らかになって来た事は、女性が職業を得るのに非常に興味を持ち、その為に学ぶようになったことです。



この村でもう一つご紹介したい事は、15年くらい前に雨期に水が溜まる所を有効に利用して、浅井戸を掘削し野菜園を開設しました。然しある年の大雨でそれが流されて壊滅しました。その後、村の中に野菜園を移動して現在活用されています。しかし、12月村に行った際に村人が是非に案内したい場所がある、と言うのでついて行きました。それは、なんと流された旧野菜園の側に、個人の野菜園が広がり、また道を隔てた場所には女性個人の野菜園が造成されていました。野菜園には浅井戸も各自が掘削しているのです。野菜も果樹も栽培されていました。みんなでコツコツと作業を続けて行ったのだと思います。感激のひとつでした。基本的に必要な事を支援することで、人々は創意工夫して道を拓いていくと改めて感じました。忍耐強く長い目で見守っていくのが支援のコツかも知れません。



写真：上は、一日中現場で監督しながらに学校の建設を楽しみにしている村長(中央)

下は、旧ニャマコロブグー小学校。

次いで

～産院開設までこぎつけたバググ村の人々について～

1993年11月から関わって来たバググ村では、支援団体としてカラを受け入れてくれたものの、実際に人々は村への仕事であっても金をくれないと仕事に協力しない、という意識でした。自分の作業の時間を費やして植林をするのだからその分の賃金を支払え、と言うことです。「金になる日本の団体が村に来た」ということなのでしょう。その為にスタッフと村の人との喧嘩が絶えませんでした。女性たちはそうではなかったようですが、どうしても男性に従う社会ですから意見を言うことはできないのです。そんな状況で折角始めた事業もなかなか進まなく、時間がかかりました。男性の理解の切掛けになったのが、女性の野菜栽培でした。野菜が消費され、販売され定期バスが通るようになりました。村が有名になり他

の村からの事業要請には、亡きバブグ村長ケーファ ジャラ氏と共にカラへ来るようになりました。バブグ村は、他の村とは違う！！と、エリート意識が高まり、周囲の村と旨くいかなくなりました。しかし、女性に収入が入ると男性も納得し、世代の交代と共に意識が少し変わってきました。2006年には小学校が開校し近郊の村からも生徒が集まってくるようになり、年によって女兒の就学数が男児を上回る事もあります。そして10年以上経過した現在、この小学校で学んだ女性が晴れて助産師になります。村に病人が多いので、早期から診療所開設を希望していましたが、村に読み書きの出来る、つまりマリ政府が決めた医療担当者になる条件(義務教育、高等学校を修了した者)を満たす人がいなかったのです。今はその規制も和らぎ最低の資格の認定ですが、小学校の就学経験がありフランス語を理解出来れば、指導側病院も研修を許可してくれるようになりました。

このような経緯でバブグ村住民管理による産院が2016年1月開設を目指して2015年1月から助産師一人の研修が始まり、現在は勉学に勤しんでいます。彼女は、ニヤマコロブグー村の女性と共に研修を受けています。

平成26年度に実施している他の事業の多くは、村民の手に委ねられました。カラはその経過を見守っています。しかし医療面は未だ支援を必要としている事が多くあります。カラの事業の今後は、これがメインになると思います。

- ・ 文末ですが、皆さまの変わらぬご理解と、ご支援に感謝いたします
今後とも宜しくお願いいたします。・ ・

特定非営利活動法人

カラ=西アフリカ農村自立協力会 2014年7月20日 作成